

# 楽しいわ

(「やさしいわ」番外編)

「た、だ、い、ま」

一人暮らしが長いと、誰も待っていないとわかっていつつもそうして言葉を呟いてしまう。一人でも、ただいま、と言って、やっと家に着いた気がするのだ。暗くても、体が覚えている場所をぱちりと押して玄関の電気をつける、と、見慣れた革靴が脱ぎ捨ててあった。驚きと、少しの緊張があって、そして、年甲斐もなくちょっと浮かれる。雑に放ってあるその靴をそろえて、リビングへ向かった。朝、消したはずの電気がドアから漏れている。近づけば、エアコンの動く音もした。寒く冷えた頬が、じんと温まる。

「ただいま」

今度は、独り言ではなく人に対して言うように、話しかけるように、口から声がこぼれた。でも、声は返ってこない。

革靴の持ち主は、リビングのソファに仰向けに寝転んで眠っていた。手頃な毛布を見つけられなかったらしく、エアコンをつけて、俺が脱ぎ捨てていたパジャマ替わりのパーカーを羽織っていた。起きているときも整った顔は、眠っているとよりしとやかに見える。丹精な顔というのは、どんなときだってどんな角度から見たって、美しいのだと、こいつと付き合うようになって知った。たぶん、眠っているときは、動きも話しもしないから、より美しさだけが際立っているのだと思う。起きているときも、これぐらいおとなしくって黙っててくれたらいいのに。

「竜胆」

近づいて、そっと呼んでみるが起きない。少しやせたようにも見えるし、疲れているのだろう。寝室から毛布を持ってきて、そっとかけてやった。ついでに髪の毛も撫でる。少し前までは、茶色く染めてアシンメトリーにしていた髪型も、最近は黒い短髪にしている。店に来なくなった代わりに、俺が家で切ってやってる、とは、宮瀬には口が裂けても言えない。柔く、しかし芯のある髪の毛は俺好みだ。

しばらく寝顔を見てから、風呂を沸かしに洗面所に行き、鏡に映った自分の顔がにやけていたことに気付く。我ながら気持ち悪い、かつ、綺麗な顔を見た後に自分の顔を見るのは大変耐え難いものがある。

風呂から出てきても、竜胆はまだ眠っていた。起こすか起こすまいか考えながら、そういえば先週も遠慮して起こさなかったら次の日の朝、「ごめん」という書置きだけ残していなくなっていたのだった。

年齢も職業も嘘を付き、拳句の果てに「イ口になってほしい」と言われたときには仰天したが、なんだかんだ見捨てられないところもあって、付き合うようになった。のはいいが、結局お互いに仕事を持っていて、特に竜胆はやのつく職業の頭を襲名したばかりで多忙らしく（正直何がどういう仕事をしているのか知らないが、彼は教えてもくれない）、中々会う時間が持てない。まさか「付き合ってるはずなのに」などとしおらしいことを言うこともなかったが、会えないという状況には、まあ人並みには苛立ちも募る。それは、短気で強引な竜胆もそうだったようだ。

。

一か月ほど前に夕飯を食べていたときだった。彼の住む屋敷で座卓の上にぱちんと何かを置いた。

「時間、合わせたりとかできないと思うから、鍵渡しとくよ。だから、九条さんのもちょーだい」

黒い漆塗りのような座卓の上に、鍵が銀色に光っている。

「有無を言わずって感じだな」

「当たり前でしょ」

竜胆は不敵に笑い、俺は呆れるのだったが、結果としてももちろん合鍵は渡した。

それから、彼の家に行くこともあれば彼がこうして、俺の部屋で待っていることもあった。が、竜胆が家に来ると大抵眠ってしまっていることが多くて、俺は遠慮をして起こすこともできない。疲れているやつを起こすほど俺も無慈悲じゃない。ただ、何度か起こさないで、彼が朝に書置きを残して去る、というパターンを繰り返したとき、その日の午後、熱湯をかけてでも俺を起こせ、というメールが来たのには笑った。

「……おかえり」

夕飯代わりにインスタントのカップスープを食べていると、ソファから竜胆が顔を上げた。毛布ありがとう、と、ごによごによ言って起き上がる。したままだったネクタイを外し、カッターシャツの首のボタンも外す。

「おはよう。スープ、食う？」

「……あー、どうしよう。すげえいい匂いする。トマトスープ？」

「インスタントだけだな」

「食う」

「ん、待ってろ」

「ていうか、起こせて言ったら、前も」

「あんな気持ちいい寝顔見せられて起こせるか」

「ふん、寝顔も美しいだろ、俺」

「黙ってるからな」

竜胆はふは、と、笑ってスープを食べる。ビールが飲みたいというので、冷蔵庫から二本取り出して一本を彼に渡した。普段はそんなに飲みたがらないのに、今日は珍しく飲みたいと言っていた。ダメだというと、すねたように口をとがらせる。本当にこいつが組長なのか、あどけなさの残る顔をされると、半信半疑になる。俺の飲み残したビールに伸びてきた手に、そっと触れた。二十歳のクセに完成された殴りだこがある。アンバランスな手だった。眠さのせいかな、柔らかな温かみがある。

「なんか、あった？」

そう問うと竜胆は思わず、といった感じで真顔になり、そして、ほどけるように微笑む。その顔は驚くほど無垢で美しく見える。

「俺はね、九条さんがそうやって言ってくれるだけで、なんでも、どうでもよくなっちゃうよ。だからここに来るんだ」

俺がどんなに尋ねても、彼は弱音ひとつこぼさない。仕事のことを俺に話すことはない。

「はあ……なんか話ずれてるけど？」

「ずれてない。大好きってことだよ。鈍いよなあ。九条さん、明日休みでしょ」

「やっぱずれてるっつーの……お前は？」

「……昼からだよ……キスしてえな」

テーブル越しに竜胆の顔が近づいてきて、僅かにかさついた唇が自分の唇に触れた。ごまかすようについばむキスを続けていると、竜胆が器用にこちらにズレてきて、俺の背中をソファに追いやるように覆いかぶさってきた。吐息が熱を帯びる。彼の柔らかな舌が、窺うように唇をなめてきて、僅かな隙間を許すと優しく入ってくる。キスがうまい。竜胆の舌は俺の口の中を何度も何度も優しく舐めまわす。今まで女の子としか付き合ったことがなかったのに、こんなにも抵抗なくキスもできるのだから、自分には潜在的に同性愛の気もあったのだろうかと思う、が、あまり考えると生産性のないことになりそうなので思考をシャットアウトする。

「九条さん、腰上げて」

言われるまま、テーブルを足で押しのけて場所をずらしながら腰を浮かせた。竜胆の手は寝起きだからか酔っているからか結構な熱をもってそこにふれた。キスだけで少し濡れて敏感になっていて、指で直接触れられるともうすぐに上り詰めてしまいそうだった。竜胆のスラックスに手を伸ばし、自分と同じようにいきり立った竜胆のそれに触れた。熱く、湿っている。体に直接触れたのは久しぶりだったような気がして、それが余計に興奮する。触られている、触っている。そのことが俺を煽った。

「そこ、もちょっと強く……」

キスをやめて、竜胆は俺の額に自分の額をくっつけた。一か月ほど切っていない髪の毛は伸びて、額に優しく触れる。柔らかく、優しいさわり心地がして、竜胆がそこにいるということを実感する。吐息が、互いの口元を湿らせる。

「一回、イク？」

「ん……」

お互いのものをこすり合わせる。血液が集中して固くなって、反り返る部分がこすれあう。竜胆が先端をくすぐるので、思わずおかしな声が出そうになって抑えた。竜胆がにやりとし、悔しくなったので俺も同じように先端を刺激した。

「ん、すごくいいよ。……九条さん、すごいエロい顔してる」

「うるせ……」

間もなく果てた。さすがに大の男が跨ったまま動いたのもあり、仕事の疲れもあり、思いのほか息が上がった、が、若い竜胆はまだまだ物足りないようで、自分の手で受け止めた精液を指先でペロりと舐め、残滓を指先でこねくり回した後、俺の下に滑り込ませた。ぬるりとした指が、一本入ってくる。衝撃でびくりとし、そのまま、彼にソファに手をつくようにさせられて下半身が露わになる。

「……も、駄目だって、そこは、さすがに」

「いいじゃん、ローション持ってきたよ」

「だ、ほんと、無理だから」

「ほんとに？ 気持ちよくない？」

彼の指がうねうねと動くが、自分の感覚では計り知れない。ふと冷静になってしまいそうで、怖くなる。二十九にもなって怖いなんていうのは情けないと思うが、未知の世界だ。

二人別々にシャワーを浴びて布団に入った。ベッドは一つしかないので、引っ付きあって寝るほかない。背を向ける俺を、後ろから竜胆が抱きよせる恰好で電気を消した。

俺と竜胆は付き合って三か月たつが、挿入まではしていなかった。

原因はもちろん俺だ。男としたことがないし、竜胆には申し訳ないと思う気持ちもあるが、そこはセックスに使う場所じゃないという意識が強いし、何よりも自分では知らない未知の感覚だから怖さが募る。竜胆は自分がゲイだということを自覚するのも早かったようだし、手つきからするに男性経験があることなどすぐにわかる。でも俺は、竜胆が初めてだ。指を入れられることに抵抗は薄くなっては来ている、竜胆のアレが入るのかと思うとぞっとしない話だった。

「……俺、ね、別に焦らないよ」

彼の声はいつだって優しい。年下にこんな風に慰められて、より、情けなさがこみあげる。

「ま、でも、やりたいのはやまやまですが」

「ほんとに申し訳ないと思ってるよ」

「ふ」

竜胆は俺の耳元でくすくす笑う。こそばゆくて、くしゃみが出た。気遣ったらしく、彼が肩まで布団を引っ張り上げた。

「さっきも言ったじゃん、俺、九条さんのことがほんとに好きなの。ガキじゃないし」

「でもやりたいのはやまやまなんだろ」

「だって男の子だもん。でもさ、九条さん……ほんとは、」

「ん？」

「いや、なんでもねー」

珍しく言い淀み、ちゅ、と、わざと音を出して竜胆が首筋にキスをした。その後、すんと眠りに落ちたようで、穏やかな寝息がずっと耳元の空気を揺らし続けていた。

\*\*\*

ことの発端は、大したことじゃなかった。と、思う。

一週間前、寒い雨の降った日だ。その日、駅まで宮瀬を送ったついでに夕飯を一緒に食べた。最近できたフレンチレストランで、ディナーも手ごろで人気だとかいう話を宮瀬がしていたのだが、その日は雨ということもあって人があまり入っていないようだったので、じゃあ行ってみるかと思ったのだ。

俺よりも二年後に入ってきた宮瀬は人懐こく、明るく、よく泣き、よく笑う。自分が末っ子だったから、妹みたいにも思えて可愛がっていた。店に新人が入ってきてはこの業界の厳しさに耐えきれないでやめて行ってしまったときも、店長と、店長の奥さんと、俺と宮瀬でなんとか乗り切ってきた。何度か飯に行ったこともあったが、こういうちゃんとしたお店に来るのは初めてだった。

「ひょおー、すごい雰囲気良い！ 九条さん、彼女さんともちゃんとこういうところ来てます？」

不意の質問に咄嗟に嘘をつく。

「え？ 彼女？ いるわけ、ないだろ。出会いとかないのも、宮瀬が一番知ってるだろ」

「で、すよねえ」

「ですよねってなんだよ」

いや、嘘ではない。彼女じゃあない。あんな男の中の男みたいな奴。ふと、宮瀬の頬がほころんだ。本当は、それ以上そんな話をしてはいけなかったのだと、今になってみれば思う。俺だって、彼女のそんな反応を見て、気付かなかったわけじゃないのに。一言、付き合っている奴がいると、それでよかったのだ。

お酒がそんなに強いわけでもないのに、宮瀬はその日グラスワインを飲んで気持ちよさげに酔っていた。そういえば、竜胆がこんな風に酔うのを見たことはない。彼は酒が強く、俺の方がすぐに酔い潰れてしまうため、彼の酔った姿など一度もみたことがないのだ。ふと寂しさがこみあげてくる。最近また、会っていない。今日は家にいるだろうか。いたとしても、疲れてまた、寝ているかもしれない。

「九条さん？」

店を出ると、凍るような寒さに目が覚める。宮瀬も頬は赤いが、でも、酔いは大分醒めたようだった。傘に、しとしとと、冬の雨が打ち付ける感触だけがする。音はない。

「もう、駅すぐなんで、歩きます」

「いいよ、送ってくよ。こんな距離でも危ないだろ。宮瀬も女の子なんだから」

「は、ちゃんと私のこと女の子って思っててくれてるんですか」

「ん、まあ、一応」

「ひどい」

宮瀬はけたけた笑って歩き出した。俺もその背中を追う。赤いシンプルな傘が、くるくると回る。たまに通る車のヘッドライトで、傘についた雫がきらりと光った。竜胆に、初めて捕まった夜もこんな雨が降っていた。会いたい。

「九条さん」

「ん？」

宮瀬が不意に振り向いて、あっと思う瞬間駆け出し、赤い傘が転がって気付けば俺の目の前に宮瀬がいた。冷えた唇が重なった。

「もっと、女の子って思ってもらえますか？ 今じゃ無理かもしれないけど、可能性はあるって、思ってもいいですか。好きです」

彼女ははにかんだように口元を上げ、急いで傘を拾い上げ、そして駅の方へ走って行った。俺の息も、告白した彼女の息も白かった。

「あ、おかえり。遅かったじゃん」

部屋に戻ると、竜胆が俺のパジャマがわりのスウェットを着てくつろいでいた。買ってきたらしいビールを何本か空け、一人で酒盛りをしている。でも、酔っている様子はない。

「なんか食う？ 鷲頭が味噌汁とかおにぎりとか作ってくれたんだけど。あいつどどんババアみたいだよなやるのが……ん？ どした？」

台所に立った彼は、リビングの入り口で立ち尽くしたままでいる俺を見た。宮瀬とのことを言うか言わないか、迷っている。別に言わないで、俺がすっぱりと宮瀬に断ればいいはずだ。俺が誰かに告白されたり、キスされたなんていう話を彼は嫌がるだろう。俺だって良い気はしない。それはわかっている。でも、竜胆の瞳に見つめられると疾しさに耐えきれなくなりもする。彼はすと俺の傍に来た。そして両手で俺の顔を挟み、ぎゅうと抱きしめられた。そのまま首筋を舐められる。生温かな舌が冷えた首を這う。

「なんかあったの？」

「なんも、ない、よ」

「……うそだな……雨の匂いするね、九条さん。久しぶり、触りたかった」

切羽詰まった彼の声が耳元です。また、きっと、仕事で何かあったに違いない。そんな切なげな声を出すな。俺だって、会いたかった。顔が離れ、舌が離れた首が冷える。鋭い、漆黒の瞳が細められる。丹精な顔だ。その顔が近づく。キスされる。キスをしてきた宮瀬の顔が浮かぶ。

反射的に顔を反らした。それが、竜胆に対しての疾しさか、宮瀬に対する申し訳なさなのかは自分でもわからなかった。

「……何？ 処女ごっこ？」

口ではふざけつつも彼は怪訝な顔をする。俺は情けなく、顔を上げることができず、フローリングの木目を見つめた。

「なんかあったんだろ？ 言えよ」

苛立ち、真面目な声だった。

「なんも、ないよ」

「顔に出てんだから、つけもしない嘘つくな」

かちんとくる。

「嘘とか、何も無いって言ってんだろ。なんでそんなつかかかってくんの」

「つかかかってなんかねーだろ。九条さん、顔に出てんだから」

「違うって。竜胆、もう今日は休めよ。お前の方こそ疲れてんだろ」

「はあ？ 話変えてんじゃねーぞ」

さすがにそんなすごまれるとこっちも引くに引けなくなる。

「そんなイライラすんなよ。お前だって、俺に話さないことあるだろ。それと一緒にだよ」

言うつもりなんかさらさらなかったのに、不意に言葉が出て行った。そうして言葉にしてみても、竜胆が仕事のことを一切俺に話さないことを、俺自身が結構不満に思っていることに気付いた。ガキじゃないんだから、いつも四六時中一緒にいられるわけでもなし、なんでも知っていられるわけでもなし、なのに、でも、どうしたって、彼のことが知りたいのだった。竜胆のことが、好きなのだった。

「何が」

「仕事のこととか……もういいよ、なんでもないって」

「……なあ、九条さん、こっち見てよ」

初めて彼と食事をした日（半強制的だったが）、目を反らす俺に彼は言った。絶対に目を反らしちゃだめだと。そんなことはわかっている。でも、こんなにも感情がうまく立ち行かない自分を、見せたくはない。見破られてしまう。

「なあ、九条さん」

彼はなお、優しくかった。竜胆の手が、俺の腕を掴む。答えるまで放さないこともわかっていた。三度、小さく呼吸を繰り返す。

「……今日、さ」

「ん？」

「職場の子に……告白されたんだよ。お前も、たぶん知ってる子だけどさ」

「あー……なんかこまいのがいたような気がするけど。で？」

「で、って？」

「は？ 別に断ったんだろ？ そんなんで疾しいとか思ってたの？ 相変わらず九条さんかわいいね。そんなんで別に俺怒んないよ」

彼が不敵に微笑んだ。が、口角が上がったというよりもひきつっていたし険阻とした言い方が彼の動揺を隠しきれていなかった。まずいことを言ったという気持ちがふつつつ湧き上がってくる。

「や、まあ、うん」

「何、断ってねーの？」

彼の手に力が入った。心苦しさをめまいを起こしそうになる。

「……断るよ、ほんと、不意のことだったし。あの子が俺のこと好きだなんて思いもしなかったっていうか、ほんと、仕事もまだ、一緒にしてく、し、」

「ついでにキスとかされたりしてねーよな？」

なんでこいつはこんなに勘が良いのだろう。言葉に詰まった俺に、彼は大きなため息をついた。ぱっと手が離れ、解放されたはずの手首がなぜか寂しい。リビングのテーブルに置いてあった携帯を手に取り、どこかに電話している。迎えにこい、の一言で電話を切り、むすっとしてソフ

アに乱暴に腰を下ろした。

いつもは大人びた余裕をかもして笑っている彼だったが、思いのほか子供っぽい反応だった。嫉妬だということはわかっていた。かわいいとも思う。ソファの傍に座る。竜胆は不貞くされてそっぽを向いていた。

「竜胆、ごめん、俺ほんとは言うつもりなくて」

「いいよ、そんな怒ってねーし」

さっきとは声音が違う。

「それ、全然説得力ないよ。ごめんな」

「……九条さん、別にいいよ。女の方に流れたかったら。あんた、流されやすいし、このままずるずる、そいつの方にいっちゃうならいっちゃうでいいよ。俺もさんざん、浮気とかしたことがあるしさ。あんたもともとノンケじゃん。やっぱ俺にオンナにされんのも嫌だろ？」

「は？ 何だよそれ」

流されやすいというのは恥ずかしながら否定はできない。でも、宮瀬にキスをされて断れなかったのは、決して女がいいと思ったからじゃない。じゃなかったらこいつに合鍵なんか渡さないし、挿入どうこうでもやもや悩んだりもしない。そもそも、竜胆からだったくせに。

「何だよそれ。お前が、俺がなんていったってイロにするって言ったくせに、ガキじゃねんだし、そんなことで」

竜胆がテーブルを叩いた。転がっていた空き缶が耳障りな音を立てる。

「そんなことでも、やっぱ男には、セックスするしないって大切なことだろ。俺は、褒められた人間じゃねえよ。そんなんわかってるよ。腐るほど人を殴ってきたし、殴られてきたし、小指を詰めさせたことだっていくらでもあって、でも、好きだと思ふ奴には優しくしたいよ。本当は、さっきだってめちゃくちゃ腹立ったし、今すぐここで、あんたのこと犯すことだってできるよ。無理矢理チンコ突っ込んだら。でも、あんた、嫌だって言うだろ。痛いよ、そんなん。気持ちよくなってほしいって思うの、当たり前だろ。セックスしてえよ。でもそれって違うだろ。……もともとあんたが好きなのは、女じゃん。違うのかよ」

竜胆の言葉は至って冷静だった。ただ、テーブルの上で握られたこぶしは白く、筋が走っている。と、玄関のチャイムが鳴った。彼は無言で立ち上がり、俺のパジャマを着たまま、出て行った。

しんと静まり返った玄関にはしっかりと冬の寒さがしみこんでいる。蘭草の香りが寒さをさらに掻き立てるようだった。鼻をすすれば、愛用している香水の匂いと最近降り続いてばかりの雨の所為で湿気の匂いもした。黒い大理石を模した土間に濡れた自分の足跡がつく。肩を濡らしていた雨粒を鷺頭が吹きながら、感情一つにじませないで耳元で呟いた。

「頭。お見えですよ」

「うるせえな、わかってるよ」

漆黒の床に似合わない、くたくたの汚れたアディダスが綺麗にそろえてあるのには、入った瞬間に気付いていた。いつもなら愛おしくて嬉しくてすぐにでも会いたいと息せき切って行くところだが、バカみたいな気まずさが邪魔をする。組のことで気まずさなんか一度も感じたことなどないのに、彼のこととなるとすぐに過剰になってしまう。そのことを鷺頭に見透かされたようで、また悔しい。

「変な意地、張ってるんですか」

「ああ、もうお前本当にうるせえな。もう帰れ」

「わかりました」

鷺頭が一瞬にやりとしたので、頭を思いきり傘で殴る。払いきれていなかった水滴がそこらに散った。

暗い中、奥の台所がある部屋だけは灯りがついていた。深呼吸を三度する。生まれて初めての緊張かもしれない。

「竜胆」

声を聞いただけで震えそうになる。好きだ。でも、顔には出さない。声にもしない。イスに腰掛けていた彼は俺が台所に入るなり立ち上がる。エアコンもつけなくて、しんと冷えた部屋にどのぐらい一人でいたのだろう。寒かったろうに、俺がいないところで勝手に暖房を入れるのが後ろ暗かったのか、そういうところもまた、愛しかった。

「あ、九条さんじゃん久しぶり。寒くねーの？ 風邪引いたらどうすんだよ。暖房ぐらい入れたらいいだろ」

「でも、お前がいないし、じゃなくて、お前、」

「彼女とはどう？ うまくいってる？ キスはもうすんでんだし、俺がいない間溜まっただろうからちょうどよかったろ？ 女は柔らかいよな」

彼は答えない。ただその場に立ち尽くしていた。自分の口から出た言葉にどんどん追いつめられ、答えを求めることも忘れて、彼の前を通り過ぎて流し場に置きっぱなしだったコップに水を注いだ。水のその冷たさにコップがすぐに曇る。指先まで陣と痛くなった。窓には細かな雨粒が丁寧に辺り、沈黙の間を縫っていた。人を説得したいなら目を見なければいけないなどとほざいたこともあったが、今は自分ができそうもない。

「竜胆、お前、ほんとにそんなこと思ってんのか」

「そんなことって」

「俺が、宮瀬と付き合うとかいうこと、だよ」

彼の声は震えていた。そんな名前の女だったか、彼と同僚だった女の顔を思い出そうとしてもまったく、背格好すら思い出せなかった。あの美容室へは、九条さんに会いに行っていただけなのだ。彼に髪を梳いてほしかったのだ。他のことなんかどうでもよかった。彼が俺の、唯一の癒しだった。それは今も、変わらない。俺に理不尽なことをせめられて、一か月も連絡をしなかったのに、ちゃんと話をしようとしてくれる。俺と向き合おうとしてくれる。だからこそ、一瞬の、怖さが際立った。

彼はもともと、ヘテロセクシュアルだったのだから、女に好きだと言われてキスをされて、揺らがないわけがなかった。ひどい言葉を言った。仕事のイラつきから八つ当たりでもあった。彼は素直に謝ったが、謝ってくれたことがまた、もどかしかった。俺が勝手に好きになったんだ。勝手にモノにした。彼が他の奴を選ぶ権利ぐらいある。

いくら同じ性であったとして、考え方や体の性感帯が女よりもわかりやすいとか探り当てられるとか、そんなものが何になる。九条さんを好きになってからだ。こんなことを思うようになったのは。女子高生でもあるまいし、ガキでもあるまいし他の男なら、それこそ体の関係だけの男なら、こんなこと思いもしなかった。感じもしなかった。仕事でいくらでも人を傷つけることができる。そういう行為自体も嫌いじゃない。でも、彼だけは、傷つけたくはない。彼が、女が良いとって、そっちに流れてしまったら俺はもう立ち直れなくなるかもしれない。受け入れられない。会えない間気が狂いそうだった。声が聴きたい。彼に触れたい。何度か彼の部屋の前まで足を運んだが、合鍵を使うことがなぜか憚れた。

それでも、次第に彼が女が良いと言うのなら甘んじてもうけようという気にもなってくる。ぐちゃぐちゃと考えるのは苦手だし、嫌いだ。いつも最善の道を選んできたつもりでいる。間違えたって、誰かを傷つけて打ちのめして正しい方へ戻ってこれるならそれでいい。自分が男が好きだということも、恥じてはいない。

でも、彼にだけは間違えたと思われたくなかった。親父に殴られたことを隠して叔父貴に殴られたのだと話したことがばれたとき、彼は言った。

「俺に、嘘なんかつかなくていいよ。竜胆のこと、ちゃんと話せよ。ちゃんと、聞いているからさ。そういうの、寂しいじゃん」

彼の手も、声も、言葉も、俺に触れるすべてが優しい。好きだった。どうしようもなく。だからこそ、彼に嫌な思いをさせたくなかった。

相変わらず答えず、コップに口をつけた。唇に冷たい水が触れる。一気に飲み干した。口が渴いていたわけでないのに、咽喉が鳴る。

「竜胆」

傍で声がした、と思うと、後ろから抱きしめられた。彼の匂いがする。すっかり冷えた服が肌にさわった。こんなパーカー一枚では寒かったはずだ。合鍵を渡したのは自分だが、渡すんじゃないかと後悔する。雨が一層、強くなったようで、ばたばたとうるさい音が響いていた。

「……お前ひとりで抱えんなよ。俺の方が年上なんですけど。しかもけっこう」

「……ふ、頼りない年上」

「悪かったな」

俺の緩みが伝わったのか、彼の声音も心なしかほっとしたようだった。前に回された手に少しだけ力が加わる。

「……悪かったよ」

「……俺も、ごめん」

「わ、お前が謝るの？ だから雨降ってんのか」

「おっさん、聞けよ」

彼の穏やかな笑い声の吐息が首筋にかかり、あたたかい。

「こないだ、ごめん。……正直、怖かったんだよ。九条さんのこと、俺、ほんとに好きなんだ。九条さんが、女の方にいったとか、俺、耐えられる気がしない。狂うよ……あと、ごめん、仕事のこと、話さないって決めたの俺だけど、それで八つ当たりとか、ほんと、ガキかって感じだよな」

「いや……あれはあれで、ちょっと可愛かったよ」

「は、バカみてえ」

「バカなのはお互い様だろ。ちゃんと断ったよ。最初から、断るつもりだった。……俺、お前が思うよりもお前のこと好きだよ。だからさ、俺、まあ、一般人だけど、ちゃんと聞いているからさ。お前のこと、もっと話してよ。仕事のことでも、考えてることで、無理すんな」

首だけで振り向くと、彼の顔もまたこちらを覗き込むようにして、そのままキスをした。温かい。水と緊張で冷えた口内が一気に熱を帯びた。苦しい体勢を翻し、真正面から唇に吸い付く。彼は煙草を吸わないから、どこかほのりと甘さを感じる。堰を切ったように、彼の呼吸も、俺の呼吸もあわただしくなる。彼の頬に触れる。少しざらついた男の肌だった。そのことに興奮した。

「ちょ、落ち着けてば」

「なんで？ 俺、めちゃくちゃ興奮してるよ」

股間を彼の股間にこすりつける。九条さんの同じ場所も、張りつめていた。テーブルを背に追いやるようにして、彼を押しながらまた、キスをした。雨の音をかき消すように、俺たちの口元からは淫猥な液体がこぼれる音がする。

彼のパーカーを脱がし、Tシャツを脱がす。ゆっくりと肌に指を這わせると、彼もまた、俺の来ていたジャケットを脱がし、シャツを脱がした。鳥肌が立つが、寒さのせいかな興奮のせいかわからなかった。寒いはずなのに、感じない。彼のデニムにも手をかけ、ゆっくりしゃがみ込んだ。

「竜胆、いいって」

「いいよ、させて」

テーブルに座らせる。わずかに立ち上がっていた彼のものを口に含んだ。口の中と同じ熱さを感じる。九条さんが声にならない息を吐いた。そんなに得意ではなかったが、今はでも、どうしてもしたかった。愛撫するたび、熱を帯びるそれが愛おしかったのだった。九条さんは、普段から好きだという俺の髪の毛を何度も何度も撫で、梳き、ときに掴んでは快感を感じている。その様に、俺はまた、燃える。

「も、いいって……りんど、まじ、やばいから」

「いいよ、出して」

彼は戸惑いの言葉を口にしようとしたが、問答無用でさらに愛撫を続けると間もなく果ててしまった。口の中に粘りが広がる。さすがに飲み込むことはできないので、口から吐きだして手のひらに乗せる。彼は恥ずかしいのかぎゅっと目をつぶったままだった。精液をのせていない方

の手でそっと、彼の太ももを開かせる。何をされるかわかったようで、それでも、彼はいつものように抵抗はしなかった。彼の股の間に入るようにし、背中をテーブルにつけさせる。

「つめてっ」

「は、逆に興奮する？」

「バカ」

精液を、彼の下の口に宛がった。ゆっくりと塗り込むようにして指で触れる。ヤマザクラの天板が赤茶色が、白く濁った液体で汚れた。ふと、気付く。

「もしかしてさ、準備してきた？」

「.....そこまで言わせるか、普通」

「そのつもりで来たってことで、いいよね」

「.....早くしろよ」

覆いかぶさるようにしてキスをした。もちろん指は止めない。右手中指を少しずつ、彼の中に侵入させる。少しでも気を反らすよう、左手はさっきまで舐めていた彼のものを握る。左手はゆっくり上下させながら、右手は丁寧に九条さんを愛す。彼は手で目を多い、息を荒くしていた。

「いい？」

「わ、かんね.....けど.....ん.....」

中へ入れる指を一本増やし、同じ時間また、ほぐす。左手は止めない。

「.....三本入ってんの、わかる？」

「.....ん、きつ.....」

張りつめた左手の中のものが反り返り、九条さんの腹にひたりとくっついている。先端からは透明の液体が少しずつ溢れていた。

「入るよ」

「ん.....熱っ.....」

自分のものを、彼の入り口に宛がって狭いそこを押し広げる。皺のよる眉間と、紅潮した肌と、僅かに唾液をこぼした唇と、九条さんのすべてが扇情的でさらに俺を興奮させる。愛しい人を痛めつけているという後ろめたさと、蹂躪するという興奮と、俺をつつむ熱さがすべて一緒になる。押し広げる。割り広げる。迎えられる。押し返される、彼を抱き起した。

「あ、あ、や、りんど、お、奥、あた、る」

「.....大丈夫？ もうちょっとだから」

「ん、なんかおもったより、だいじょぶ、そう.....だけど、ケ、ツ、変」

「九条さん、」

「ん」

「ありがとう」

彼が俺の肩に手を回す。熱い。

「大丈夫？」

「ん、なんとか。つーか背中痛いよ。もう若くないんだから、テーブルはちょっと、な」

湯呑を渡すと、彼は布団から起き上がりほうじ茶を美味そうにすすった。俺のジャージを着ているのを見るとなんだか笑える。隣に座ると、彼は俺の頭を撫でた。

「ん？」

「いや、伸びたなーとおもってさ。宮瀬も、お前の話ばっかするからさ。竜胆くん、どうしてるんでしょうねーとか、大丈夫だったんでしょうかねー、とかさ。……いやほんと、あいつ、お前の話ばかりするから、お前のことが好きなんだと思ってたよ」

「あのねえ。もういっそのことつぶすかあの店」

「バカ、冗談でも笑えない」

「冗談じゃない……俺さ、」

九条さんは湯呑を傍に置き、俺をまっすぐに見た。風呂に入り、髪の毛が普段と違って寝ている様子がまた、欲情的だった。キスをすると、彼はは、と半笑いになる。

「俺さ、人に胸張れないこともたくさんしてるし、それこそ、九条さんが引くようなこともいっぱいしてる。でも、俺、やっぱり九条さんの傍にはいたいんだよね」

「……お前さ、一番最初、俺に一生添い遂げる覚悟あるって、言ったじゃん」

頷いた。その気持ちは今も変わらない。九条さんは、まっすぐに俺を見た。

「じゃあ、大丈夫だよ。俺も、傍にいる。お前が飽きないんだったら。……まあ、上手くいかないこともあると思うけど、お前が堅気じゃないとか、なんかそういうのとか……俺にはよくわかんないこともあるけどさ」

彼がぐいと俺の頭を引き寄せ、胸に抱く。

「二人の方が、楽しいよ」

「ふ、すげえ殺し文句」

そのまま布団に倒れ込んだ。雨が、激しく降る。

次の日、今日が仕事休みでよかったと、腰がぐだけた九条さんは笑った。

END